赤とんぼは日本人の「原風景」である

勝山市の赤とんぼ移動経路調査の指導・助言をいただいている、赤とんぼ研究の第1人者である上田教授のお話から、日本人と赤とんぼの関わりが見えてきます。

石川県立大学　上田　哲行　教授

田んぼと赤とんぼの関係

赤とんぼは、初夏に田んぼで生まれて夏を高い山で過ごし、秋に田んぼに戻る生活をしています。田んぼに水が多くあるときに水を必要とする幼虫時代を過ごし、成虫のときは水があまりいらないので、田んぼの1年間の耕作サイクルにぴったりと合っています。

赤とんぼ（ここではアキアカネ）の特徴は、小さな卵を大量に産むこと。元々は卵を大量に産んでもすぐダメになってしまう環境に生息していたのではないかと考えられます。

人間が赤とんぼを作った？

弥生時代に稲作が始まり、赤とんぼが生息していた場所が水田に変わりました。水田は彼らにとって非常に安定した場所なので、死ぬはずだった卵が生き残るようになり、大量に赤とんぼが発生するようになったと考えられます。

このように水田を作っている人間の活動と結びついて数を増やしてきたので、人間が赤とんぼを作ったと考えることもできます。

未来に残す原風景

赤とんぼが舞う風景というものは、日本人にとって「ふるさと」の「原風景」ではないかと考えます。原風景は時に生きる支えともなる重要なものであり、原風景を形成する上で赤とんぼなど身近な生き物は、非常に重要なはたらきをしています。そういった自然・環境を私たち大人が子どもたちに残し、子どもの遊び場の中に近景として生き物や自然が満ち溢れていることは、子どもの人格形成に非常に大切なことです。

荒廃した風景しか残っていないような未来ではなく、日本人のシンボル、また身近で分かりやすいシンボルとして「赤とんぼ」を残していかなければならないのです。